

ワークシート・資料編

I ワークシート

2年生 世界史 授業プリント 番外編 周辺諸国から考える「華夷思想」

2年 組 番 氏名

学習課題：「周辺諸国の視点から考察したとき、華夷思想のどのような問題点がみえてくるか」

1. 「華夷思想」とは（授業プリント⑱ R80を参照）

春秋戦国時代の諸国間の交流により生まれた、文明世界「中国」と外界の「夷狄」を区別する思想である。しかしその境界は固定的でなく、文明とともに「中国」も広がるとされた。

2. エキスパート学習 … 各班の資料を読み込み、学習課題について分析を行う。

3. ジグソー学習 … 新しい班で、エキスパート学習の内容を共有し、学習課題について分析を行う。

4. 学習課題「周辺諸国の視点から考察したとき、華夷思想のどのような問題点が指摘できるか」（120字）

2年生 世界史 授業プリント 番外編 エキスパート資料 A

・「中華」と遊牧国家

1. 前漢時代の「公主」制度…前漢では、皇族や宮中の女性が公主(皇帝の娘)として異民族の君主に嫁がされた。

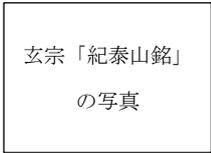
時期	漢の皇帝	遊牧民族の君主	典拠資料
前197年以降	高祖	匈奴・冒頓単于	『史記』匈奴列伝 『漢書』匈奴伝
前192年	恵帝	匈奴・冒頓単于	『漢書』恵帝紀
前174年	文帝	匈奴・老上単于	『史記』匈奴列伝 『漢書』匈奴伝
前152年	景帝	匈奴・軍臣単于	『史記』匈奴列伝 『漢書』匈奴伝
前107年	武帝	烏孫・獵驕靡	『漢書』西域伝
前104~前101年	武帝	烏孫・軍須靡	『漢書』西域伝

・公主の目的は?
・武帝期,嫁ぎ先がなぜ変わった?

2. 唐と遊牧国家

・資料① 玄宗「紀泰山銘」(726年)

東西南北の異民族が、通訳を重ねて我が朝に来貢するのは、歴代帝王の重なる徳化の賜物であって、朕は何にもまして敬慕する。



・資料② 突厥(テュルク)の碑文(8世紀前半)

ウテュケン(モンゴル高原にある聖山)の山林よりよいところはない。国を保つべき地はウテュケンの山林である。この地に住んで、我々は唐の民と和睦した。彼らは金・銀・酒・絹を限りなく与える。唐の民の言葉は甘く、その絹は柔らかい。…甘いその言葉、柔らかいその絹に欺かれて、多くのテュルクの民が死んだ。…その地に行くと、お前たちテュルクの民よ、死ぬぞ!ウテュケンの地に住んで、隊商を送るならば、お前たちにいかなる憂苦もない。

・資料③ 安史の乱(唐の記録)

(都落ちした皇帝のもとに)ウイグル・チベットの使者が次々と到着し、和親を請い願って、唐を助けて反乱軍(安祿山・史思明)を討つこと願い出た。

・資料④ 安史の乱(ウイグルの碑文)

…(ウイグルの可汗のもとに)「この苦難から救ってください。援助してください」という(唐の天子の)言葉が来た。神である王(ウイグルの可汗)がこの言葉を聞いた時、自ら強力な軍隊とともに天子の居所(中国を指す)にお進みになられた。

・資料⑤ 唐とウイグルの絹馬貿易(唐の記録)

元来ウイグルは功名をたのみ、乾元(安史の乱にあたる元号)の後より、しばしば使節を派遣して、馬をもらって絹と交換した。そこで毎年、交易しに来て、馬一頭で絹四十匹を交換し、ややもすると数万頭の馬をもたらしてきた。

年代	唐の出来事	中央ユーラシアの出来事
7世紀	・唐の建国	・唐の建国を東突厥が援助 ・東突厥が唐に服属,皇帝に天可汗の称号を贈る。
8世紀	・唐の領域最大に	
	・則天武后が周に国号を変更 ・玄宗,開元の治	・ウイグル,東突厥を滅ぼす。 ・ウイグル,安史の乱で唐に援軍を送る。
9世紀	・安史の乱 …唐の領域縮小 藩鎮が各地で自立	・ウイグル,唐と絹馬貿易を盛んに行う。
	・ウイグルとの絹馬貿易が盛んに	
10世紀	・唐蕃会盟碑	・ウイグル帝国の崩壊
	・黄巢の乱	
	・唐の滅亡	

唐と遊牧国家との間で、互いの関係についての認識が、どのように異なっていたらうか?

2年生 世界史 授業プリント 番外編 エキスパート資料B

・「中華」と日本

1. 後漢・三国時代の中国と日本

中国に朝貢する周辺国は、常に中国の下位に位置し、利用される側だったのだろうか？

・資料①『後漢書』東夷伝

建武中元二(57)年、倭の奴国が献上品を奉じて朝賀し、使者は自ら大夫と称した。倭国の極南海である。光武帝は印綬を賜った。安帝の永初元(107)年、倭の国王の帥升らが生口(奴隷)百六十人を献上し、拜謁を願った。

・資料②「親魏倭王」の称号の背景にある、国際関係の分析(小川幸司『世界史との対話』(上)一部改)

中国の三国時代という動きの中、朝鮮半島北部から遼東半島にかけて、自立性を強めた公孫氏政権があった。この公孫氏政権を、江南の呉王朝が支援し、華北の魏王朝に対抗させていた。234年に四川の蜀王朝の諸葛亮が病死すると、魏は公孫氏政権の制圧に乗り出し、238年、これを滅ぼす。しかし、呉がこの地に軍隊を送り、魏の遼東半島守備隊を拉致するなど、魏の攪乱作戦を行う。その翌年、卑弥呼が魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号を賜ったのは、単なる偶然ではないだろう。

2. 隋・唐と日本

無礼な国書を受け取ったにも関わらず、煬帝が日本に使者を遣わしたのは、どのような意図があったのだろうか？

・資料③『隋書』倭国伝

(煬帝)大業三(607)年、倭王の多利思比孤(天皇)が、使者を派遣して朝貢してきた。その使者が言うには、「海西の菩薩天子が熱心に仏教を興隆させていると聞きました。そこで使者を派遣して拝礼させました。同時に、僧侶数十人が仏教を学ぶために参りました。」と。その国の書状には「日出づる処(東方)の天子、書を日没する処(西方)の天子にいたす。つつがなきや、云々。」とあった。皇帝はこれを見て不快となり、外交大臣に言った。「外国からの書状で無礼なものがあれば、今後は奏上するな。」と。翌年、煬帝は文林郎の裴清を派遣して倭国に使いさせた。

・資料④ 遣唐使について

日本からの公式の朝貢使節として、630年に開始。4隻の船で編成され、1隻につき100人が乗船した。生還率は、すべての遣唐使を通して計算すると、約6割程だったという。

荒波の中の遣唐使船についての絵画資料

・資料⑤ 第9回遣唐使【唐の記録】(717年)

玄宗の開元年間の初め、日本国は再び使者を遣わして来朝させた。その使者は…儒者から経書を教えてもらいたいと願い出た。そこで玄宗は…趙玄黙に…教えさせた。日本の使者はそこで玄黙に広幅の布を贈って入門料とした。その布には「白亀元年の調布」と書きつけてあったが、中国人が、日本で調として布を納める制度があろうなどとは嘘だろうと疑った。その使者は、中国でもらった賜り物のすべてを投じて書籍を購入し、…帰っていった。その時の副使阿倍仲麻呂は、中国の国ぶりを慕って…去ろうとしなかった。

・資料⑥ 第12回遣唐使【日本の記録】(754年)

…正月一日に…朝貢の諸外国の使節は朝賀を行いました。…唐の朝廷は古麻呂の席次を、西側にならぶ組の第二番の吐蕃の下におき、新羅の使いの席次を東側の組の第一番の大食国(ペルシャ)の上におきました。そこで古麻呂は次のように意見を述べました。「昔から今に至るまで、久しく新羅は日本国に朝貢しております。ところが今、新羅は東の組の第一の上座に列なり、我(日本)は逆にそれより下位におかれています。これは義にかなわないことです」と…

遣唐使についての記録の変化と、年表を見比べたときに、何がわかるだろうか？

年代	隋唐	遣唐使	日本の出来事
7世紀	・隋の高句麗遠征(三回)	(遣隋使)	・小野妹子を隋に派遣
	・唐の建国	①犬上御田鍬 ②③④	・遣唐使の派遣開始
8世紀	・領域最大	⑤⑥⑦	・白鳳文化
	・開元の治	⑧山上億良 ⑨阿倍仲麻呂 ⑩	・大宝律令の整備 ・平城京に遷都
	・安史の乱	⑪(中止), ⑫ ⑬, ⑭(中止)	・天平文化
9世紀	・領域縮小 藩鎮が台頭	⑮(中止) ⑯⑰	・平安京に遷都
	・黄巢の乱	⑱最澄, 空海 ⑲	・弘仁・貞観文化
10世紀	・唐の滅亡	⑳(中止) 以降なし	・遣唐使の停止 ・国風文化の発達へ

2年生 世界史 授業プリント 番外編 エキスパート資料C

・「中華」と「安史の乱」

安禄山は、唐に移り住んだ後も、なぜゾロアスター教由来の名前を変更しなかったのか？

1. 安禄山

安禄山は、ソグド系の父、突厥人の母との「混血児」。祖先の故地はサマルカンドと推測されるが、母がブハラに由来する「安氏（中国における性）」と再婚したことから、「安」を名乗る。「禄山」はソグド語・ペルシア語で「光」を意味する「ロクシャン」の音訳。ゾロアスター教の光の神にもとづく。突厥の地で育ったが、一族の危機に際して唐に移り住み、軍功を重ね、楊貴妃などに接近し、玄宗の寵を得た。751年までに平盧・河東・范陽の三節度使を兼ね、唐の当面、北面の辺防と軍事を掌握。楊貴妃の兄・楊国忠と対立し、755年に多民族から成る軍団を率いて独立運動を展開、洛陽・長安を占領する。756年に洛陽を都として大燕皇帝を称し新政権を樹立。しかしそれを境に心身に変調をきたし、継承に不安を覚えた子の慶緒によって殺された。

安禄山の進軍
に関する地図資料

2. 安禄山死後の「安史の乱」の行方

安禄山の部下、史思明は、安禄山を殺した安慶緒に従わず、范陽で自立。唐軍・安慶緒・史思明の3つ巴の様相となった。北方にはその三勢力をはるかに凌ぐウイグル族がおり、756年、唐が援軍を依頼し、唐とウイグルの提携が実現。結果、763年にウイグル・唐の連合軍が勝利をおさめ、安史の乱は終結した。

しかしその過程で常に唐が優位に戦いを進めたわけではなく、762年には史思明に代わった史朝義がウイグルに援軍をもとめ、10万の大軍が唐軍を襲うなど、事態は流動的であった。また諸勢力は全て多民族混成部隊であった。乱後はウイグルの相対的優位が実現し、唐政府はウイグルの後ろ盾のもと、各地で自立した藩鎮勢力と対抗しながら、かろうじて存続していた。

3. ユーラシア大陸の変動と「安史の乱」

・「安史の乱」と吐蕃

チベット高原で巨大な王国を築いていた吐蕃は、唐で玄宗が即位した頃から盛んに西方から侵犯した。751年、唐がタラス河畔の戦いでアラブ軍に敗北し、唐の中央アジア経営が瓦解、さらに安史の乱の勃発で西方防衛が甘くなると、吐蕃は勢力を拡大、763年に長安を占領した。

唐王朝の分立後は、ウイグルと吐蕃の「2強」ともいえる状況が続いた。しかし9世紀半ばに両勢力は内紛から分裂し、各地は小集団が割拠する状況となった。

・「安史の乱」とイスラーム

8世紀中頃のアッバース朝成立は、イラン東部のイラン系亡命政権が西進して実現したものであった。

一方、イラン系のソグド人の血をもつ安禄山が主導した安史の乱では、遊牧民族だけでなく、タラス河畔で勝利したイスラーム兵も唐に参戦したという記録がある。

8世紀末から9世紀初頭
東アジアとその周辺の勢力図
に関する地図資料

唐と吐蕃・イスラーム勢力
の動きの間にどのような
関係が見出せるか？

年代	唐周辺の出来事	西アジアでの出来事
7世紀	・唐の建国 建国を東突厥援助 ・東突厥, 唐に服従	・イスラームの成立 ・ササン朝滅びる ・ウマイヤ朝成立
8世紀	・則天武后が周に国号 を変更 ・玄宗, 開元の治 ・安史の乱 …藩鎮が各地で自立	・ウマイヤ朝, イベリア半島進出 ・イラン東部で革命軍結成 →アッバース朝成立 ・タラス河畔の戦い ・アッバース朝最盛期
9世紀	・絹馬貿易が盛んに ・ウイグル分裂・四散 ・吐蕃の王統が分裂	・アッバース朝の支配力低下 …地方政権が各地で自立 ・イラン系のサーマーン朝自立 …多くのトルコ系軍人仕える
10世紀	・黄巢の乱 ・唐の滅亡	・トルコ系軍団の自立・進出加速

II ワークシート記入例

2年生 世界史 授業プリント 番外編 周辺諸国から考える「華夷思想」

2年 組 番 氏名

学習課題：「周辺諸国の視点から考察したとき、華夷思想のどのような問題点が指摘できるか」

1. 「華夷思想」とは（授業プリント① R80を参照）

春秋戦国時代の諸国間の交流により生まれた、文明世界「中国」と外界の「夷狄」を区別する思想である。しかしその境界は固定的でなく、文明とともに「中国」も広がるとされた。

2. エキスパート学習 … 各班の資料を読み込み、学習課題について分析を行う。

<p>(A)・公主の目的…遊牧民との同盟</p> <p>・武帝で嫁ぎ先が変わった…武帝は匈奴奴攻撃のため、別の遊牧国家・烏孫と同盟</p> <p>・唐と遊牧国家…唐の作った資料は「華夷思想」が明確だが、ウイグル側の資料は、唐を警戒したり、唐の要請に応えただけといったり→認識がずれている</p> <p>・年表…唐の建国を突厥が援助、安史の乱以降に絹馬貿易盛ん→必ずしも唐が優位なわけではなかったのでは？</p>	<p>(B)・日本は伝統的に中国に朝貢している</p> <p>→日本は中国の下、「華夷思想」の中？</p> <p>・資料②…魏の時代は「三国時代」で、対抗する呉は公孫氏を支援。魏が苦戦する様子</p> <p>→このタイミングで卑弥呼。日本は魏がピンチだとわかっていた？</p> <p>・遣唐使…安全とはいえない</p> <p>・阿倍仲麻呂は積極的に、学ぶ姿勢強い</p> <p>・757年は様子がおかしい。文句言っている</p> <p>→年表で「中止」増加。「安史の乱」関係？</p>	<p>(C)・「祿山」…ゾロアスター教由来</p> <p>・安祿山は唐に移り住んでも名前変えず</p> <p>→彼の野望は「中華」の統一ではない？</p> <p>・安史の乱は「ウイグル」の動き次第で流れが変わる様相だった。唐は無力。</p> <p>・ウイグルだけでなく、吐蕃も唐に進攻→地図を見ても、唐が「中華」とは見えない。</p> <p>・イスラーム兵も安史の乱に唐側で参戦</p> <p>・イラン系亡命政権→ソグドの血をもつ安祿山の動きと関係???</p>
---	--	---

3. ジグソー学習 … 新しい班で、エキスパート学習の内容を共有し、学習課題について分析を行う。

①A から分かること

- ・前漢時代は遊牧民と「同盟」→この時点で「優劣」の差がない。遊牧国家と対抗するため、別の遊牧国家とも同盟
- ・唐の資料は「華夷思想」を強調…でもウイグル側の認識は「唐に頼まれたから」スタイルで安史の乱を支援
- ・年表を見ても、「中国が絶対に優位」という内容なし。安史の乱だけでなく、建国に際しても、突厥の援助がある。

②B から分かること

- ・中国に対し、伝統的に朝貢している日本だが、「華夷思想」における上下関係だけでは説明できないことがある。
- ・魏は「中華」を統一している状況でない。邪馬台国は国際情勢を理解し、より有利な条件を引き出せると考えたかも。
- ・危険な遣唐使も学ぶ価値があれば行く→安史の乱を境に中止相次ぎ、最後は廃止。日本もしたたかに考えている。

③C からわかること

- ・安史の乱の首謀者、安祿山はゾロアスター教由来の名前を変えない…「中華」に媚びていない、独自の価値観
- ・安史の乱の行方は、ウイグル次第でどうにでもなった。吐蕃と共にこの時代は「2強」。唐は見る影もない。
- ・西からイスラーム兵も参戦。イラン系ソグド人、アッバース朝、両者が関係していても不思議ではない。

4. 学習課題「周辺諸国の視点から考察したとき、華夷思想のどのような問題点が指摘できるか」

東アジアの国際関係の実態は、中国の状況に応じて、政治的に優位に立とうとする遊牧国家や、したたかな

外交政策を展開する日本の姿がある。イスラーム勢力まで考慮すれば、「中華」はますます相対的になる。

事実と異なる「華夷思想」に固執することは、中国の政治や経済の発展を阻害するのではないかと考える。

(147字…1行につき30字が目安)

III 学習課題に対する解答例

・「B」とした解答例①

中国はウイグルや日本などの後ろ盾のもとで存続できているのにも関わらず、「中国」を中心だと考え、周りの異民族を下に見る華夷思想によって周辺民族からの反感をかっていた。そのため華夷思想によって「中国」としての一体感は生まれるが、周辺諸国の視点から見るとその思想が中国を孤立させる原因となっていた。

→「華夷思想」の矛盾を指摘し、「中国」を相対的に見ようとする考えを読み取ることができる記述である。「中国を孤立させる」とする、このような解答例は他にも複数見られたが、具体的にどの資料を根拠に論じているかが明確でないため、「B」とした。

・「B」とした解答例②

中国は最も強い国家に見えて、実は常に周りの国の支えや後ろ盾があって成り立っていた。しかし、「中国は強い」「一番だ」というような、華夷思想からくる、他を下に見ている考えから、もし支えとなっている国が分裂したときに中国がどうなるかが明確に見えなくなった、その点で問題だと考える。

→「中国」を相対的にとらえようとしている一方、どの資料を根拠にしたかが明確でないところは他の多くの生徒に見られる傾向だった。しかしこの解答例が特徴的なのは、「周辺国に変化が起こった場合の中国がどうなるか」という、周辺国に軸足を置いた考えが示唆されている点である。資料や授業内容をどこまで理解してこの記述が生まれたか不明瞭なため「B」としたが、さらに考察を深めれば、全く新しい視点が生まれる可能性を感じさせてくれる点で、非常に面白い解答である。

・「A」とした解答例①

魏が苦しんでいるタイミングで卑弥呼が使いを送ったことや、唐が安史の乱に苦戦する中でウイグル軍が唐に援軍を送り8年続いた戦いが終結したことをふまえると、必ずしも中国が圧倒的な覇権を持ち続け国力を充実させていたとは言えず、また周辺国も中国を敬っていたわけではないと推測できる。また、安史の乱の記録の、唐とウイグルの記録の差異から、中国が史実をゆがめていた可能性があることが問題視される。

→「華夷思想」の内容と、実際の政治状況の矛盾を、三つの資料からバランスよく考察できている。加えて表現も具体的で、根拠を明確にしながらもコンパクトにまとめることができている。中国が史実をゆがめていることに対しての指摘は、他の「A」の解答にも複数見られ、「歴史」そのものを相対的に見る姿勢が一部の生徒の中に生まれていると考えられる点で、非常に前向きな材料を示してくれている。

・「A」とした解答例②

中国として、「華夷思想」は素晴らしいものと考えていたが、周辺国からすればそれは心地良いものではなかった。中国としても、力のある遊牧民の王室と関係をもったり、三国時代の魏のように、倭国からの支持を誇示して蜀に対抗したりするなど、完全に「夷」を見下すということはできなかったように思われる。それ故、周辺国はもともと中国に対する不信に加え、「華夷思想」が完全なものでなく、隙のあるものだったので、安史の乱が起こったと考えられる。

→「華夷思想」に対する捉え方を中心に、中国と周辺国の温度差を指摘しているが、そこに対しても具体的な根拠を示しながら考察し、表現できている。この記述に特徴的なのは、「華夷思想」を掲げた中国自身が、内部で矛盾と葛藤を抱えていたとし、かつそれが中国自身の「隙」となったとする考察である。このように解答した例は他にあまりなく、さまざまな考察の余地を感じさせる、非常に興味深い記述である。